

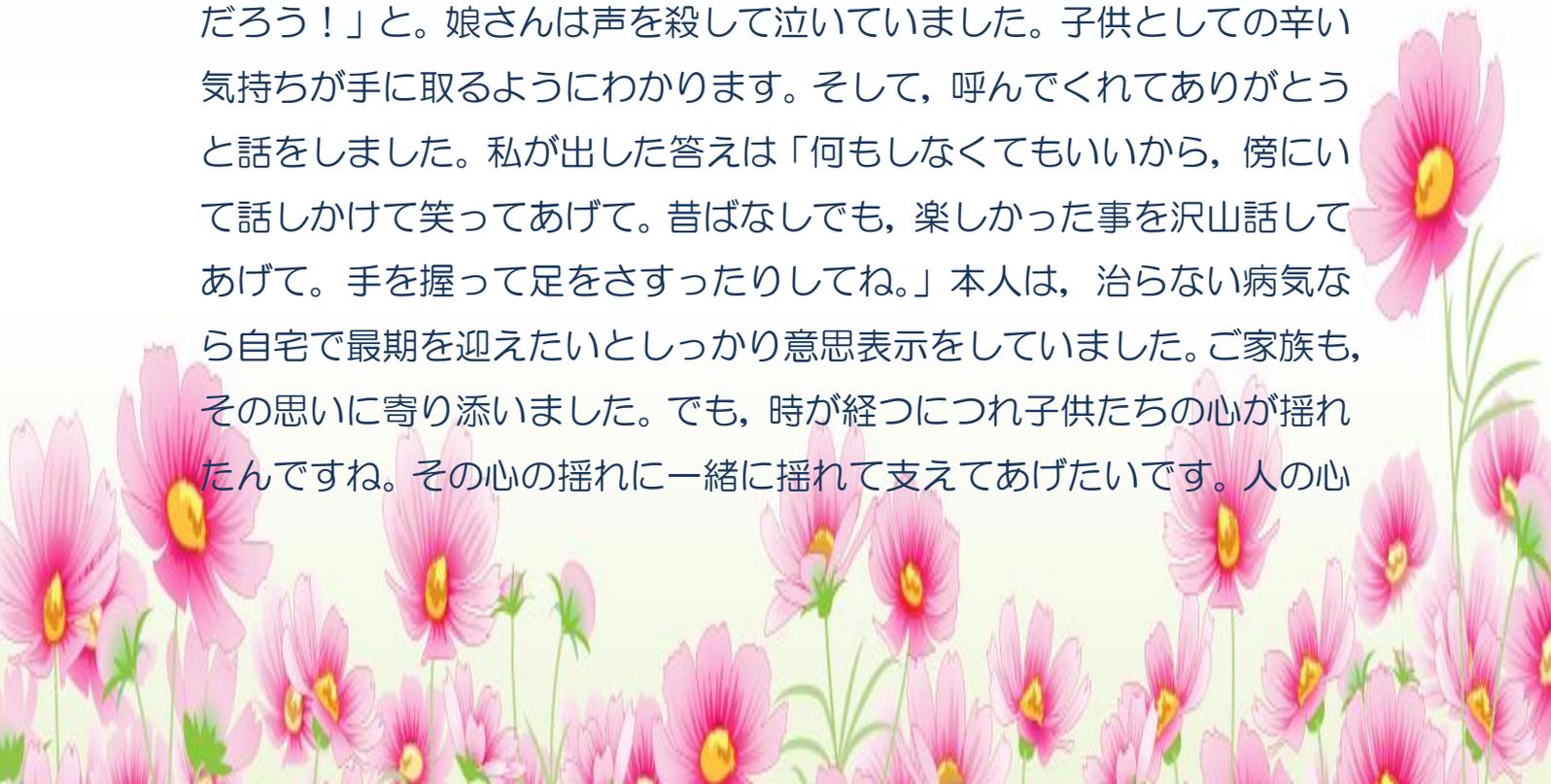
# ACPにおける多職種連携（在宅）

## 訪問看護ステーションフレンズ

ほさか あけみ  
保坂 明美 様

今回、函館市医療・介護連携推進協議会の大規模研修でお話させて頂きありがとうございました。テーマが「ACP」というこの頃どこでも聞かれる言葉、私は「ACP」と言う言葉ではなく「心づもり」と言う言葉で話をしました。

どうしようか？とかどうするといいんだろうね～とか、たわいのない会話の中から自分の気持ちを口に出して語りあう、そんな場面や、時間をさりげなく作っていければいいのかなと思います。訪問看護師になって20年、いろんな方達と出会い、お別れもありました。その当時から私の目の前にいる方は、自分の思い「どうしたい」を話してくれました。もちろんご家族様も、です。夜中にご家族様より、「母が苦しいと言っているので来てください！」と電話をしてくれて伺うと、よく眠っていました。息子さんと娘さんが二人で待っており、二人から「俺たちは、母に何をしてあげればいいのか！何にもできない、どうしたらいいんだろう！」と。娘さんは声を殺して泣いていました。子供としての辛い気持ちが手に取るようにわかります。そして、呼んでくれてありがとうと話をしました。私が出した答えは「何もしなくてもいいから、傍にいて話しかけて笑ってあげて。昔ばなしでも、楽しかった事を沢山話してあげて。手を握って足をさすったりしてね。」本人は、治らない病気なら自宅で最期を迎えたいとしっかり意思表示をしていました。ご家族も、その思いに寄り添いました。でも、時が経つにつれ子供たちの心が揺れたんですね。その心の揺れと一緒に揺れて支えてあげたいです。人の心



は揺れていいんだと思います。

ACP って決めごとではないと思います。その人の心が揺れてもいいように、支える自分達も揺れてあげましょう！今回、AYA 世代の方の最期のお話をしました。私の娘と同じ年。他人事ではありません。ご夫婦の心の揺れに、私達も訪問診療の先生も揺れて支えて関わりました。私達だけではなく病院のナースの皆さんや、一番支えになったのはご主人はもちろんご家族、子供達、もう一つ {ママ友}、つまり地域の皆様なんです。その人が住んでいる地域のチカラを忘れてはいけません。これからも、心づもりを目の前の方と話していきます。

皆さんも是非、「ねーどうしたい？」から始めませんか？

